

ながしいながしい ペンギンの話

いぬい とみこ 作

山田三郎 絵



ながいながいペンギンの話

いぬいとみこ作

山田三郎絵



愛蔵版わたしのほん 理論社

理論社の愛蔵版
わたしのほん

1967年初版
NDC 913

ながいながいペンギンの話

作者 いぬい とみこ

画家 山田三郎

発行者 小宮山量平

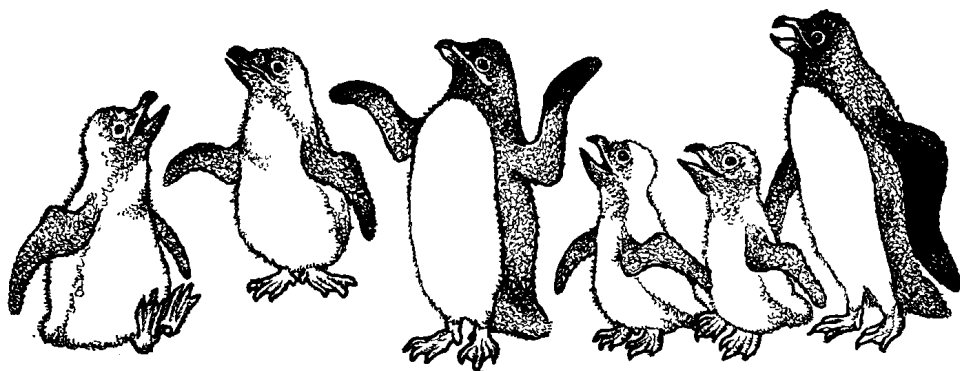
発行所 株式会社 理論社

東京都千代田区神田神保町一の六四
振替東京九五七三六 電話(二九四)六五〇四・五

発行日 一九六八年 五月 第二刷

定価 五〇〇円

はじめに



これは、

せいたかのっぽの

「ながいながいペンギン」

の話^{はなし}ではなくて、

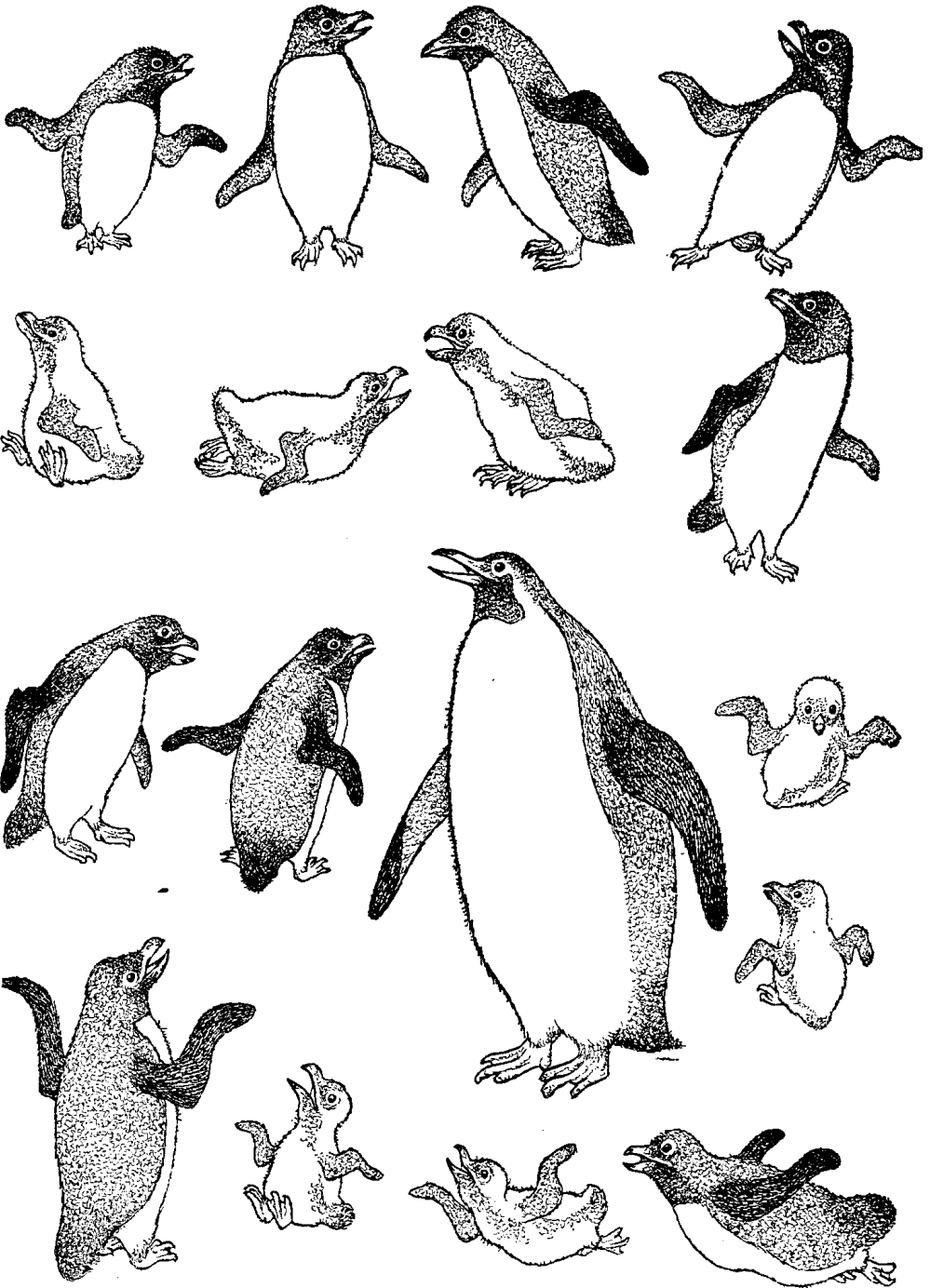
南極^{なんきょく}にすむペンギンのふたご

ルルとキキの

ぼうけんについての、

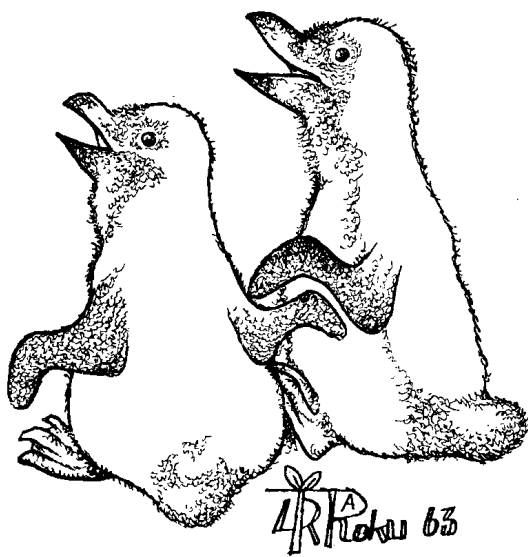
「ながいながい」話^{はなし}です。

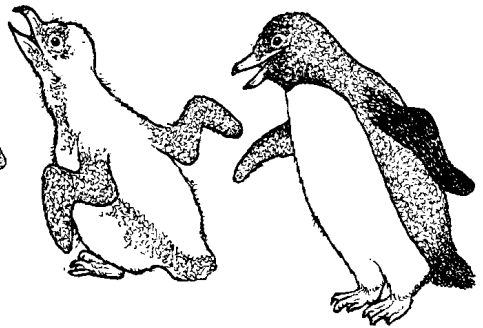
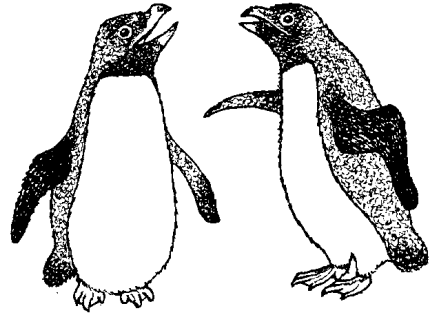
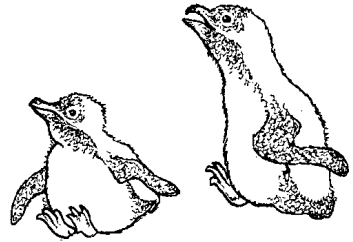
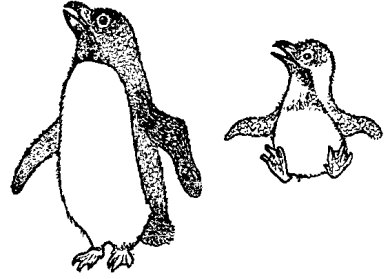
——
作者^{さくしや}



やま
だ
さ
ら
う
山
田
三
郎

そ
う
て
い
・
さ
し
え





もくじ

第一のおはなし

くしやみのルルとさむがりやのキキ／5

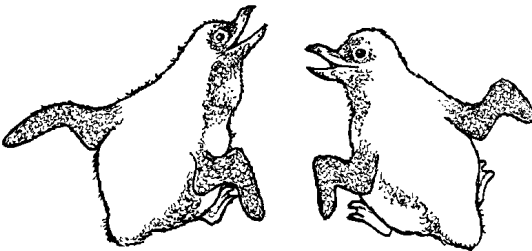
第二のおはなし

ルルとキキのうみのぼうけん／65

第三のおはなし

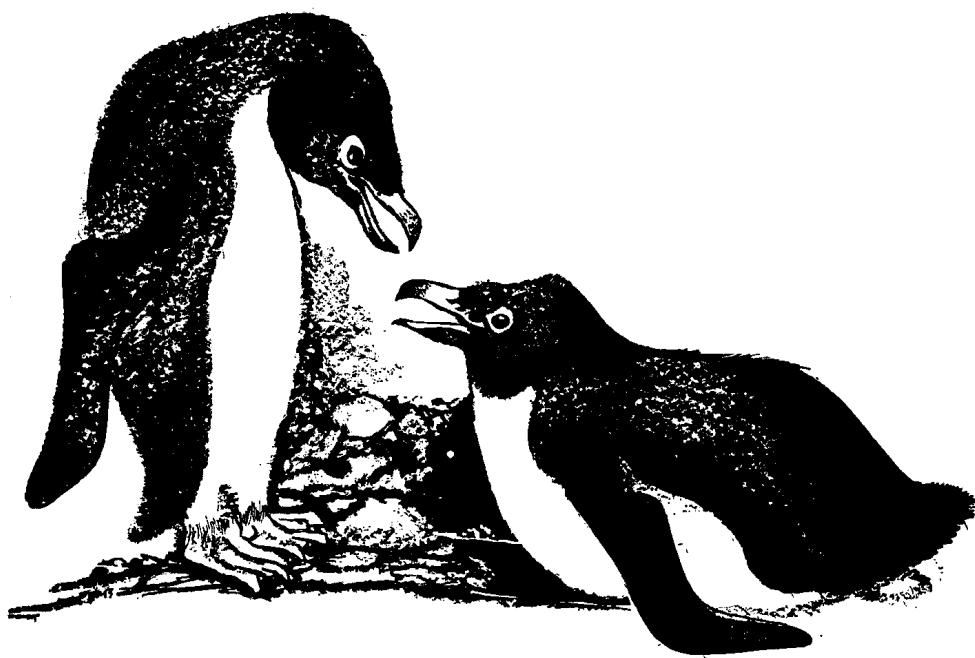
さようなら さようなら にんげんさん！／127

あとがき／180



第一^{だいいち}のおはなし

くしやみのルルと
さむがりやのキキ



とおいとおい南極なんきょくの島しまに、ペンギンのおとうさんがいました。

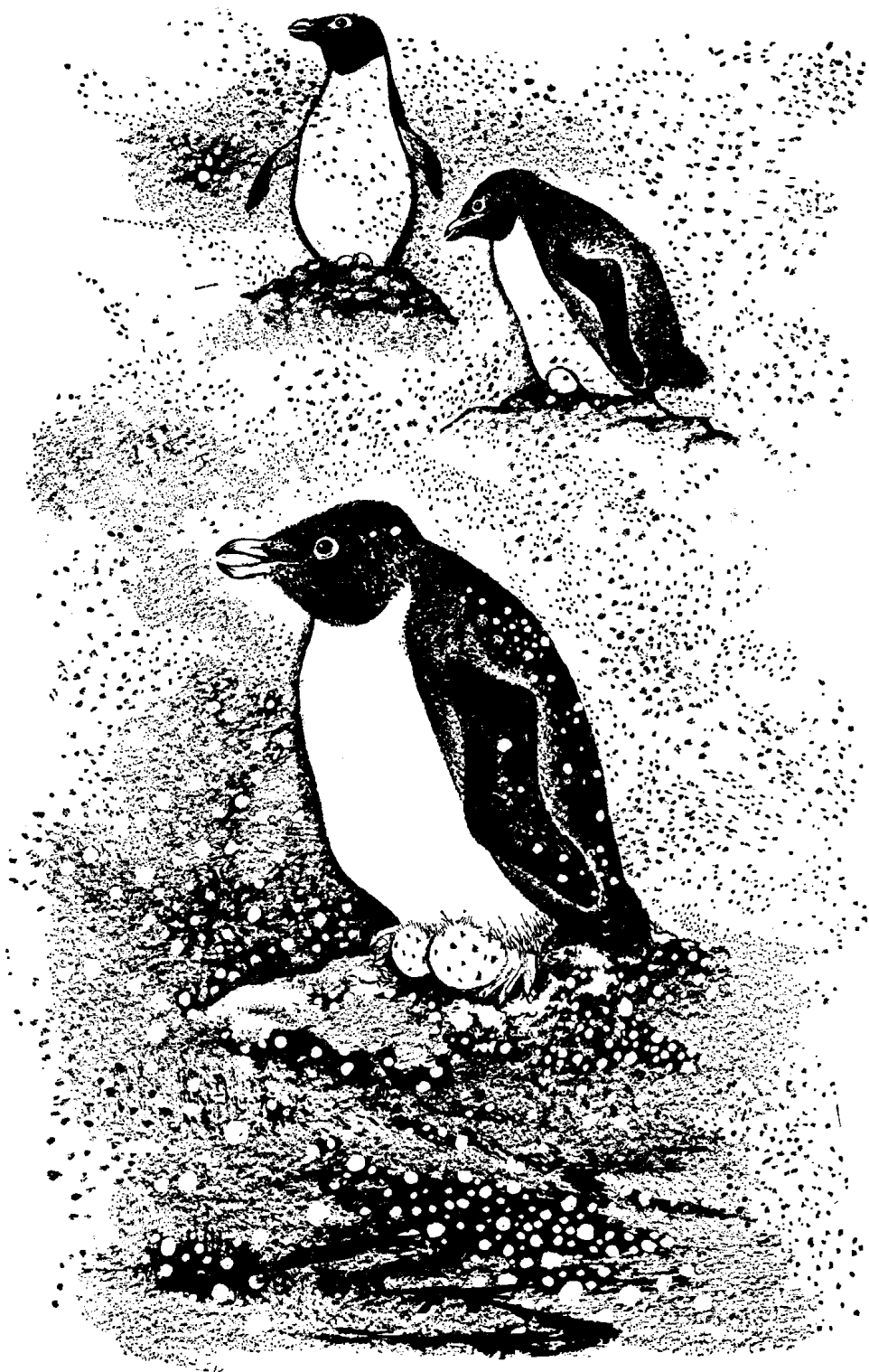
あたりは、みわたすかぎり、まっしろい、ゆきと、こおりのはらっぱです。木もありません。草くさもはえていません。目めもあけていられないほど、ひどいかぜが、いちにちじゅう、こなゆきを、ふきつけています。

おとうさんペンギンは、つめたいはらっぱに、じっと、うごかないで、立たっていました。

おとうさんペンギンは、足あしの上に、たまごをふたつ、だいていたのです。もしも、いま、おとうさんペンギンが、ここをうごいたら、ほかほかとあたたまっている、ふたつのたまごは、すぐにつめたくなってしまうでしょう。そして、たまごのなかのあかちゃんも、つめたくなってしまうでしょう。

びゅうびゅうと、うずをまいてふきつけてくる、こなゆきのなかに、おとうさんペンギンは、立たっていました。いつまでも、うごかないで立たっていました。

ゆきあらしは、やみました。



おそろしいかぜの音は、もうきこえません。おとうさんペンギンは、ほっとしました。足の上のふたつのたまごは、ほかほかと、あたたまっているのです。

（よかった。たまごは、ぶじだったぞ。）

かおのまわりまでつもったゆきを、くちばしではらいのけながら、おとうさんペンギンは、おもいました。

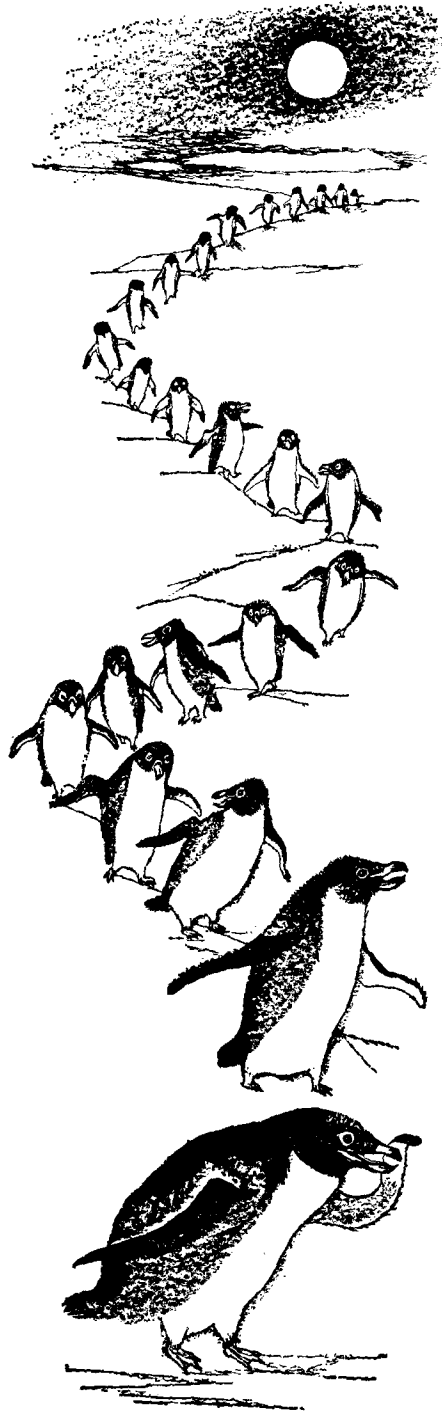
そのとき、ゆきのはらっぱのむこうに、くろいリボンのようなぎょうれつが見えてきました。

このあいだから、とおくのうみべへ、たべものをとりにいっていた、おかあさんペンギンが、みんなといっしょに、かえってきたのです。

あたまで、ゆきにうずめられている、おとうさんペンギンをみつけると、おかあさんペンギンは、かけよってきました。

「まあまあ、ごろうさま。でも、うみのこおりも、とけはじめましたよ。たまごのなかのぼうやたちが、目をさますのも、もうじきでしょうね。」

おとうさんペンギンのまわりに、あつくつもったゆきをかきのけながら、



おかあさんペンギンが、いいました。
「ああ、ひさしぶりに、そらが見える。ゆきあらしのこない日は、ほんとうにいいね。」

おとうさんペンギンが、いいました。

つぎの日も、またつぎの日も、島のうみべには、ひどいゆきあらしが、あ

れくるいました。

おとうさんペンギンとおかあさんペンギンは、じつと、ゆきのなかに立^たたまま、あかんぼうペンギンの出^でてくる日を、いまかいまかとまちました。

コツ……コツ、コツ……コツ、

あるあさ、おかあさんペンギンは、はっとしました。おとうさんペンギンの足^{あし}のほうで、ちいさなちいさな音^{おと}がしているのです。

とうとう、たまごのなかのあかちゃん^{あかちゃん}が、からをつつつきはじめたのです。

おかあさんは、むねが、どきどきしました。かたほうのたまごに、コチンとひとつ、われめができて、かわいいくちばしが、のぞきました。

それから、ねずみいろのもじやもじやのあたまが、ひよっこり、そとへかおをだしたとおもうと、このぼうやは、くしゅんと、くしやみをしました。

「たまごのそとは、さむいなあ。それでもぼくは、出^でていかなくちやあ。」
ぼうやは、はねをひろげました。それから、おなかの下^{した}にちぢめていた、ちいさなあしを、もじもじさせました。



おかあさんは、くちばしで、ぼうやを立たせてやろうとしました。すると、「いいの。ぼく、ひとりでするよ。」と、ペンギンのぼうやはいいました。

「なんて、げんきのいい、ぼうやだろう。」

おとうさんペンギンは、にっこりしました。

ぼうやは、みかんいろの足を、ふんばって、とうとう、ひとりで立ちあがりました。そして、くしゅんと、また、くしゃみをしました。

ゆきにつつまれた、はらっぱには、つめたいかぜが、ひゅうひゅう、ふきあれていたのです。

ぼうやは二本の足をふんばって、かぜのなかに、しゃんと立っています。

「なんてかわいい、げんきなぼうや。」

おかあさんペンギンも、にっこりしました。

もうひとつのたまごは、なかなか、われてきませんでした。

コツ……コツ、コツ……コツ、

なかから、あかちゃんが、つつついているのに、たまごのからが、かたす

ぎるのでしょうか。

おひるごろ、とうとう、こちらのたまごにも、ひとすじ、われめができました。かわいいくちばしが、ちらっ^みと見えて、また、ひっこんでいってしまいました。

「どうしたの？ ぼうや、出^でておいで。」

おかあさんペンギンが、びっくりして、よびました。けれども、ぼうやは、



へんじをしません。

「出^でておいで、そとは、あかるいよ。」

おとうさんペンギンが、よびました。けれども、ぼうやは、へんじをしません。

「出^でておいでよ、そとは、ひろいんだよ。」

こんどは、さっきたまごから出^でてきた、おにいさんが、ちいさなこえで、よびました。

「いやだよ。そとは、さむすぎるよ。」と、たまごのなかから、ちいさなこえが、こたえました。

「なんて、さむがりやの、ちいさなぼうや。」

おかあさんペンギンは、にっこりしました。

おとうさんペンギンも、わらいました。じきに、たまごのなかで、きゅうくつになって、さむがりやのこのぼうやも、かおを出^だすでしょう。

ペンギンのおとうさんとおかあさんは、ふたりのぼうやのなまえを、かんがえはじめました。